

あべの観音だより

第46号

高野山 大師教会 七福
真言宗 無憂庵
【発行所】
大阪市阿倍野区阪南町三十四-一十七
電話 〇六(七五〇九)三八〇六
発行人 法源



子どものころ、 僕は「のび太」でした。

藤子・F・不二雄

日本だけにとどまらず世界的に有名漫画の『ドラえもん』はご承知の通りであります。お題にいたしました「子どものころ、僕は「のび太」でした。」は漫画家であり、ドラえもん原作者である藤子・F・不二雄氏(1933-1996)の幼少期の自分であったと記述しています。

(※引用2009年/「小学四年生」二月号/小学館) 夢を与え、希望を与え、人々に勇氣と笑顔を教えてくださった偉大な御方と痛感しております。その勇氣と笑顔をいただきながら今、多くの人々はドラえもんを見て育ち、夢と希望が広がったことと存じます。

『ドラえもん』の物語は、のび太が困ったときの神頼み的な存在として何でも叶えてくれる物語の展開になっていることはご承知のことと思います。「こんなこといいな、できたらいいな」と願いを人は日常の中に求めます。

仏教では生きる根底には苦がある四苦八苦を説き、求めるものを得ては、また欲は欲をつくり果てることがない求不得苦と説きます。

しかし、希望や目標がなければ人は何を抛り所として生きていけばよいのか指針を立てることができないものです。

「ドラえもんは千手観音」

「のび太は希望の象徴」



と、私的観点で思っています。千手観音は千本の手にあらゆる持物(法具)を持ち、自在なる方便(手段)をもってどのような人々も余すことなく救済する象徴をあらわします。人々の悩みは数多であり、一つの救済方法をもっても救うこともできないことも多々あります。

現在、全国の寺院で見受けられる千手観音像は手の数は42本が大半であり、2本の手は合掌、そして残りの40本の手で25の世界を救済に働き、40本×25の世界千の救い手となります。いわゆる無限の世界を救済する象徴をあらわしているのです。

世界から絶え間なく飛び込んでくる世界情勢のニュースなどでは、希望の報道より不安を煽る報道のほうが圧倒的に現代では多く感じます。それだけ良きことを報道できる時代とは遠ざかる傾向であるのだと察知できます。また欲を求める社会が欲によって環境破壊までにも連結されているものです。宇宙には数えきれないほどの星の数がありますが、生命体としてある星は地球だけかもしれません。それは宇宙に委ねられた最後の使命星でもあるかも知れません。

のび太の願いは「こころの願い」ととらえ、人にはあらゆる願いが心に宿っています。その願いがドラえもんとなって現れています。人の願いを留めておけば、いつまでも変化が起きることはありません。願いを溜め、時が過ぎると溜め息に変化します。心の思いを発起することは、新しい今日、新しい自心が始まるのです。仏教では『菩提心』を何よりも大切にします。菩提心とは“さとり”を求める心、そして“さとり”に向かう心をさします。その赴く所は三摩地という安寧の境地をさします。

何ごとも願いはすぐに叶うことはなく、 また、すぐに叶う願いならば それは願い事とはいえないでしょう。

少しずつ、少しずつ夢や目的への思いを馳せながら三歩進んでは二歩下がり、また一歩踏み出していくことで少しずつでも前進していきま。進むことに躊躇しているときは足踏み状態でもいいのです。願いは夢でもあり希望でもあり、この夢や希望は逃げることはなく、踏み出さないことは、自らの願いを自ら遠ざけていることとなります。また他人と比較しながら自分を進めては遅れる一方となります。童話で有名な「ウサギとカメ」では、ウサギはカメという他を比較することにより自己が優劣であると驕る(慢心)気持ちがある原因であると察することが出来ます。また仏教では“さとり”に向かうも、断念する思い、諦め、後退してはいけないと伝授します。衆生を救済するまで命を全うする誓願を僧侶は約束(戒律)により保持しています。

夢や希望をもつ願いから不退転(後退)しないためには、願う気持ちだけでなく挑戦する第一歩を踏み出すことが大切です。日本の実業家であり、今や世界に渡りオートバイ・自動車など輸送機器メーカーとして企業された本田技研工業創業者、本田宗一郎氏(1906-1991)は行動の肝要さについてこのように言ってくれています。

人は見たり、聞いたり、試したりの 3つの知恵でまともまっているが、 多くの人は見たり聞いたりばかりで 一番重要な「試したり」をほとんどしない。

人は「見る・聞く・行動」の3つで成り立ち、大人になるにつれ「見る・聞く」だけの2つになることが多いものです。自分の経験値を高める上で、見聞したことより願いが生じ、夢や希望へと思いは変化していくのです。

最初の3つは、子供の頃は誰もが経験しています。しかし、大人になると3つ目の行動することを忘れがちになります。体験した経験値より現象を見るだけでわかった気になったり、安易に他人に聞いたりするだけで済ませてしまいうことがよく見受けられるものです。

実践(実行)してこそ、初めてわかる。 それが真言密教の教えです。

「試す前からわかっている。」なんて思うこともあるのが大人の習慣化された思考回路。確かに、きつとそうかもしれません。しかし、それは「想像上」でしかわからないことであり、そう思っ試してみることをしないのでは、いつもの日常を変えることはできないこととなるのであり、時は過ぎゆくばかりとなるのです。思いだけに留まらず試してみる。行動する人は変われることをしています。人は、この行動するまでの行程の中に迷いが生じています。

悩むことは夢を見つけるために必要である

夢や希望というものを見つけるためには、無駄なことをしている自分に嫌気がさしたときにも生じることもあるものです。また、何をしたいのかが見つからないときはどのようなしたらよいのかを映画監督、俳優など多岐にわたり活躍する北野武氏はこのように述べています。

勉強するから、何をしたいか分かる。 勉強しないから、何をしたいか分からない。

厳しくも聞こえる言葉ですが、真実の幸せの道を見つめるにはこれが納得させられることと感じます。勉強というのも学問を学ぶ意味も含まれることですが、行動し体験してこそ学ぶことが智慧(心)となっていくものです。

“さとり”でなくとも夢や希望、目的や今日一日という目の前の目標をもつことでもいいのです。これも立派な目標です。仏教で『菩提心』は前に進むために四つの力が働いていると説きます。

- 一、自力(本来備わる仏心の自覚する力)
- 二、因力(過去からによる功德による力)
- 三、他力(他者からの縁により生じる力)
- 四、加行力(計らいより加わる努力の力)

『瑜伽師地論』

この四つの力が私たちの心の中に『菩提心』という“やる気スイッチ”を生起させています。この四つの力の内、自力と因力は決して後退しない気持ちであります。そして、「やるぞ、がんばるぞ」と意気込む気持ちがあることもありますが、時とともに日が経てば断念していることもあります。これが他力と加行力と説きます。このように菩提心という“やる気”を分析して説いていくと面倒にもなってきます。

難しいことは簡単に考え、 何ごともとらわれないように考える

人は新たな境地でスタートするとき、緊張や不安など体験したことのないことに落ち着きがないものです。新たな境地に赴いたからとて過

去に起きた出来事にとらわれ、これからの新天地での自分に自信を見失う必要はまったくありません。その不安は取捨選択に努めることが必要です。緊張や不安のときは冷静に自分を観察できていないのです。それは自身を見失うことにつながり、「やる気」を消失（後退）させてしまう原因となるのです。

わたしたちは人生を歩んでいく上で入学式、入社式、歓迎会、卒業式、成人式、送別会、結婚式、葬式など数多くの儀式儀礼を通過し、新しい心境に自覚が生成させながら人生を歩んでいくものです。この儀式儀礼を行うことにより過去に決断（決別）させる思いが生じます。区切りを一つずつつけていかなければ、ときには気持ちが進めなく過去にとらわれる原因を構築させる要因ともなります。自己の執着にとらわれないためにも、人生を自己と共に前進していくためにも、新しい夢や希望を持つためにも儀式儀礼は自己に約束（決断）させるために必要不可欠の通過儀礼なのです。

やまない雨はない

「雨過天晴」という四字熟語がありますが、辛い状況はいつまでも続かなく、晴れる日が必ず到来するという意味ですが、この晴れる日を待ち望み、一日も早く心に快晴が訪れるには願うだけでなく、実践していくことが手っ取り早い方法であります。

今、酷暑を迎えています。少し経てば秋から冬へと季節を肌身を感じ、心に新たな季節が芽吹いてきます。この季節変わり目を機に衣替え同様、心の衣替えも大切なことです。わたしたちの思いには、過去にとらわれている無駄な気持ちと決裂（断つ）することで気持ちにスイッチされ、夢や希望に向かい、どんどん夢や希望に近づいていきます。また夢などに向かっているときには、夢の中に自分が本当にやりたかった新たな夢に気づくことも多々あるものです。

努力が効果をあらわすまでには時間がかかる。多くの人はそれまでに飽き、迷い、挫折する。

ヘンリー・フォード（1863-1947）

人の年齢は様々であり、いま自身の年齢を置きかえると「あつという間に、この歳になつていた。無常迅速だな」と思うことです。その積み重ねてきた歳には一日一日があつたのです。その一日一日の積み重ねの中にあつた行い（業）が、人生を形成させながら命を育んでいます。一日一日である一所懸命が人生に変化をもたらせ、種という自己の可能性に枝葉を広げ小さくてもいい、自分らしい花を咲かせれば人生は立派となるのです。

夢を持つことは平等

夢を叶えている人、叶えるとはどのようなことであるのであろうか。

時代や時期、環境など差はあるものですが上流社会にいる人だけが夢を叶えるわけでもなく、やる気ひとつで夢は実現できるのです。いくらスタートラインが違ってても、自分なりの目標、目的への意識を持っていれば、ウサギとカメの

競争でもわかるように人生に「あぐら」を組まなければ成長し続けます。

「夢や目的を叶えている人とは」

自分の道を見つけ、その道を自分らしく歩いている人こそ、夢を叶えている人。

これは本当に自分自身の道を見つけ、歩んでいるならば他の道を探す必要はないからであり、迷わなくてもいいということなのです。決意の表れでもあり、自信を持つ人が選択できる道。

目標とする学校や会社に就職したいと目指し、達成したい目標があり、その目標に到達したとき、喜びと同時に新しい人生が始まります。

わざわざ歩きにくい道を歩かなくとも、誰かが作ってくれた歩きやすい道を歩むのもひとつの選択肢です。また敢えていばらの道を選択する人もいます。それは新しい絶景という心境地を自ら見て感じたいと思うからであります。

新しいことにチャレンジしようとするならば、誰もが歩いたことのない道を挑むことであり、後世のために歩きやすい道を作つてあげることも大事です。しかし覚悟をもって挑まなければその道は想像を絶するほどに険しい道となることです。

人生にやさしい道は無いと思うこと

やさしい道とは、我に「とらわれない」という執着を癖（習慣化）にしないことが肝要であり、心に智慧という無限の可能性を信じていくことです。いわゆる後悔の練習をあえてする必要なんて全くなく、過去に苦悶する人の癖は後悔を練習し、後悔を上達させている人です。

迷ったら前へ。苦しかったら前に。

つらかったら前に。後悔するのはそのあと、

そのずっと後でいい。

星野仙一氏（1947-2018）

プロ野球選手・監督であり、人生を前に前にと勇敢かつ多くの人々に感動と勇気を与えてくれた星野仙一氏の胸に突き刺さるお言葉です。

仏教では苦しみを『無明』といい、心に明るさが無く彷徨うことを意味します。苦しみは「迷い」がすべての苦悩の根源なのです。この迷いは不安同様、見えない心を脅かしている魔（māra）であり、心に執着した過去に蓄積された心の深い奥に貯蔵された囚われた現象（心象）であり、この現象なんて何も無いと説くのが般若心経の真髓の教えなのです。般若心経の般若とは「智慧」をあらわし、心経とは「智慧をもって心の迷いを破砕し、苦しみを取り除き、楽を与えてくれる教え」なのです。

星野仙一氏の言う通り「迷ったら前へ。苦しむと後でいい。勇気をもたらえるお言葉です。歳をとどめることなく、時空間とともに過ぎゆく時の流れに逆らつてまで自分自身を止める必要もなく、過去に戻つてやり直そうとする必要もなく、すべては今から変えれば、すべては新しくなっていくのです。

このように人々が思う想像力が世の中を創造させながら成長・進化させているのです。

のび太くん同様に、心に思う願いを叶えてくれる千手観音（ドラえもん）は自心の強い願いと、その願いから起こす行動により加持力という人智では計り知れない不思議な仏の力が、願いを叶える方向へと運んでくれるのです。

楽するために生きるのではなく、

幸せになるために生きるのである。

人は弱気になることは誰にでもあるものです。弱気のときは動かないことが肝心です。それは弱気のときは判断力がとぼしく迷いが生じる時機なので、その判断力は自信のない時の決断となります。したがって後々に「あの時の判断は正しかったのか？」と疑問から不安を増幅する結果がともないます。

仏教では四苦八苦である苦悩が機縁に応じ、誰にでも生じます。この苦悩が根底にあることを自心にも自覚しておくことで、失敗をしたときには、生きる上で「自分だけではないのだ。」誰にでもがあることなのだ」と強く言い聞かせ、過去は戻せず、今どうするべきかに専念するのが肝要です。釈迦の説く「善をなすのを急げ。悪を心から退けよ。善をなすのにのろしたら、心は悪事をたのしむ。」今やるべき最善のことを何ごとにおいても、他人にとつて善になるならばなおのこと急ぐことが大切です。行動すること自心にも善という平穏と安心が訪れます。

苦の味を知らない人は、楽の味も知らない。

人は楽をするために生きるのではなく、幸せになるために生きるのであり、楽と幸せは捉え方によっては紙一重とも感じる人もいることでしょう。何事も、何かを得るにも、楽な道なんてどこにもなく、「あの人は楽しんでるな」と思う人も影では誰よりも努力をしている人です。弱音を吐かない、弱味を見せない人はなおのこと努力を見せる素振りもしないでしょう。人の笑顔の裏には想像を絶する努力があるので、この努力というものも見えないものであり、努力に苦手意識をもつのが人間の本能でもあります。自分のためだけでは、天井という限界があり、努力しても、目標に到達したときには誰も待つておらず、虚無感の心境地が待つのみなのです。過去から積み重ねた小さな努力が成功するための大きな自信へと変貌を遂げていくのです。成功の秘訣はコツコツがコツなのです。

そばにいたいよ。君のために。

出来ることが、僕にあるかな

いつも君に、ずっと君に

笑っていてほしくて

映画「STAND BY ME ドラえもん」

ひまわりの約束 秦基博（歌詞一部抜粋）

努力は真実の幸せに気づくための最短の方法。右記「いつも君に、ずっと君に。いつも笑っていてほしくて」は、のび太の心の中にある仏心がドラえもんであり、のび太の思いは努力によって願いがドラえもんとして現れているのです。